三種の神器

Tomohiro Inada

稲田智宏

学研M文庫

三種の神器

稲田　智宏

学研M文庫

2013年3月26日　初版発行

●

発行人――脇谷典利

発行所――株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元――株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 ―中央精版印刷株式会社

© Tomohiro Inada 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは――編集部直通　Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは――
販売部直通　Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『三種の神器』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター　TEL 03-3401-2382

http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

い-21-1

三種の神器——もくじ

はじめに 9

第一章 三種神器の現在と即位の礼 21

剣璽御動座 22
宮中三殿 28
本体と分身 37
昭和の即位の礼 45
平成の即位の礼 55
政教分離 60
三殿の改修 64

第二章 三種神器の神話的な背景 67

神器の出現　68
神器の降臨　74
神璽　81
①璽の意味　81
②さまざまな宝珠　84
③怪物と珠　89
④玉と玉手箱　95
⑤倭大国魂神と玉　100
神鏡　103
①鏡の神秘　103
②八咫鏡の意味　107
③伊勢と日前の神鏡　110
④斎宮と鏡　113
宝剣　119

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

①大蛇を斬った剣　124
②剣と蛇　129
③呪具としての剣　132
④日本武尊と熱田　136
鏡と剣と玉　144

第三章　三種神器の歴史的な経緯

天武天皇と草薙剣　152
神器の継承　155
焼け出された熱田宝剣　160
熱田宝剣の実見　166
宮中神器の実見　173
壇ノ浦における神器の実見　183

なぜ見てはならないのか 186
神鏡の焼亡 189
大刀契の中の霊剣 198
海に消える宝剣 200
宝剣の補充 205
南北朝と神器 207
後南朝と神器 213
神器のその後 215
おわりに 220
文庫のためのあとがき 226
主要参考・引用文献 229

三種の神器

常州大学図書館
藏書章

稲田 智宏

学研M文庫

三種の神器——もくじ

はじめに 9

第一章 三種神器の現在と即位の礼 21

剣璽御動座 22
宮中三殿 28
本体と分身 37
昭和の即位の礼 45
平成の即位の礼 55
政教分離 60
三殿の改修 64

第二章 三種神器の神話的な背景 67

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

神器の出現　68
神器の降臨　74
神璽　81
①璽の意味　81
②さまざまな宝珠　84
③怪物と珠　89
④玉と玉手箱　95
⑤倭大国魂神と玉　100
神鏡　103
①鏡の神秘　103
②八咫鏡の意味　107
③伊勢と日前の神鏡　110
④斎宮と鏡　113
宝剣　119

①大蛇を斬った剣　124
②剣と蛇　129
③呪具としての剣　132
④日本武尊と熱田　136
鏡と剣と玉　144

第三章　三種神器の歴史的な経緯

天武天皇と草薙剣　152
神器の継承　155
焼け出された熱田宝剣　160
熱田宝剣の実見　166
宮中神器の実見　173
壇ノ浦における神器の実見　183

なぜ見てはならないのか 186
神鏡の焼亡 189
大刀契の中の霊剣 198
海に消える宝剣 200
宝剣の補充 205
南北朝と神器 207
後南朝と神器 213
神器のその後 215
おわりに 220
文庫のためのあとがき 226
主要参考・引用文献 229

はじめに

今からおよそ九百年前、平安時代の後期の宮中で典侍（ないしのすけ）という職にあった、藤原長子（ちょうし）という女官がいた。典侍は天皇の秘書のような役割を果たすもので、また長子は当時の第七十三代堀河天皇（在位一〇八六－一一〇七）の寵愛を受けていたとされる。『蜻蛉（かげろう）日記』の作者で歌人としても知られる藤原道綱母の血を引く長子は、父の顕綱（あきつな）が国司を務めた国名と自身の役職から讃岐典侍（さぬきのすけ）と呼ばれ、『讃岐典侍日記』を残した。

日記には深い関係だったと考えられる堀河天皇の発病から崩御、そして次の天皇となった鳥羽天皇（在位一一〇七－二三）に仕えながらの堀河天皇への深い追慕の思いが記されている。崩御から十年ほど経って、長子は天皇の霊が憑（つ）いて託宣を発するといった言動をとるようになり、そのため宮中を追われると

いう、もの悲しい後半生を送った。それは本来的に彼女に巫女的な資質があったためか、哀しみのあまり静かに病んでしまっていたのかは解らない。ただ残された日記は、二十九歳の若さで世を去った堀河天皇への、思慕の念に満ちた日記であることはたしかである。

そんな『讃岐典侍日記』のなかに、本書に関わる事柄として興味深く思える箇所がふたつある。ひとつは、容態の芳しくない天皇に病気平癒の加持祈禱が行われるが少しも効果は現れず、苦しみが治まるどころか譲位を考えるほど重篤になり、そうしたなかで息も絶え絶えの天皇は、

…「せめて苦しくおぼゆるに、かくしてこころみん。やすまりやする」とおほせられて、御枕がみなるしるしの箱を、御胸のうへに置かせたまひたれば、…

という行動をとった。つまり、あまりにも苦しいので試してみよう、苦しみが和らぐかもしれない、と言って、天皇はその枕元に置いてある「しるしの箱」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com